



すべての人が、幸せになる権利を持っています。
人権について、身近なこと、小さなことから、始めませんか？

トランスジェンダーの五輪参加について

東京オリンピックが終わりました。開催の1年延期や、ほとんどの競技が無観客となるなど、オリンピック史上初となる出来事が多くありました。その中には、トランスジェンダー（体と心の性が一致していない）であると公表した選手が、出場したということもあります。

女子重量挙げのニュージーランド代表であるローレル・ハバード選手は、1978年に男の子として生まれました。1998年にはニュージーランドのジュニア記録を樹立するなど期待される選手でしたが、性別への違和感から2001年に競技を止めてしまいます。そして、2012年に性別適合手術によって女性となり、2017年ごろから女性選手として重量挙げ競技に復帰し、東京オリンピックに出場しました。

国際オリンピック委員会（IOC）は、2015年にトランスジェンダーの人たちにも、選手として競技することを認めるガイドラインを策定しています。女性だった人が性別適合手術を行い男性選手となった場合は無制限で参加できます。男性だった人が女性となった場合、男性ホルモンの値が12カ月間一定以下であること等の4つの基準をクリアすれば、女性として競技できるというものです。

しかし、これに関して賛否両論が起きました。性的少数者にもオリンピックの門が開かれたという賛成意見もある一方、選手からは「女性にとって不公平で悪い冗談のようなものだ。」「ドーピングを許すようなものだ。」と反対の声も上がりました。確かに、男性から女性になった選手は、過去の競技実績を見ても有利なように思います。

東京オリンピック・パラリンピックの大会ビジョンである「多様性と調和」には、性的指向のみではなく、性自認などの視点に立った「多様な性のあり方」が含まれています。競技の公平性という面では、まだまだ課題があるように思いますが、ローレル・ハバード選手の出場は、性的少数者のオリンピック出場にとって、大きな前進だったと思います。